

天安門事件、金融危機、 日露戦争、天使の墮落

ノンフィクション作家
立花隆



×月×日

天安門事件で失脚した趙紫陽総書記は、その後二〇〇五年に亡くなるまで、北京の路地裏の自宅で軟禁状態に置かれた。一切の公的場面に姿をあらわすこともなければ、政府の許可なく外部の人間と面会することも許されなかった。その死後、私的に録音された六十分テープ約三十本に及ぶ極秘の回想録が発見された。秘密のテープは友人たちの手から手へ渡され、香港経由でアメリカにわたり、二〇〇九年五月アメリカで出版された。それが最近日本でも『趙紫陽 極秘回想録』(光文社 2600円+税)として刊行された。

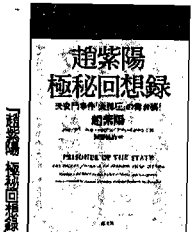
あの天安門事件における武力鎮圧の決定がいかにして下されるにいたったかが、詳細に語られている。それは中ソ首脳会談で、北京訪問中だったゴルバチョフが帰った直後だった。学生たちはハンスト統行中で、常務委員会内部で戒厳令を発動すべしとの声があがっていた。流血の事態だけは絶対に避けるべきと考えていた趙紫陽は打開策を講じるべく鄧小平に極秘の一対一の会見を申し込む。ところが鄧小平の自宅におもむくと、なんとそこには政治局常務委員会のメンバー全員が招集されて趙を待っていた。趙が学生と対話し寛大な措置を取るべしと主張すると鄧はイライラした不愉快そうな表情をした。李鵬らが立って、事態を悪化させたのは趙の融和

路線だと非難した。鄧もそれに賛成し、「ここで後退する姿勢を示せば、事態は急激に悪化し、統制は完全に失われる」と戒厳令発動を許し、李鵬らをその責任者に任命した。趙紫陽は形式的には中国の最高権力者のはずなのに、すべてが趙紫陽の意志とは無関係にどんどん進行していく。「はらわたが煮えくり返る思い」でそれを見守っていた趙は、自分は総書記として学生を武力鎮圧することなど絶対にできないと、その場を辞し、家に帰るなり辞表を書いた。

これほど赤裸々に党中央内部の権力闘争の実態が当事者の手であばかれるのは、はじめてのことだ。最後に中国の未来を論じ、

国家の近代化を望むなら、市場経済の導入と議会制民主主義の採用が必須(長い移行期間が必要)といい、その最終目的を達するためには、複数政党制の導入と報道の自由が必要、とまで言っている。中国がそこまで行きつくにはまだまだ長い時間がかかりそうだ。

ここの二年ほどの間に起きた世界的金融危機は、史上未曾有のものだった。なにしろ世界中の大手金融機関が計上した損失は一金五千億ドルにも達し、IMFの予測では最終的に四兆ドルに達するという。各国政府は巨額の公的資金を注入して金融機関を救済しようとしたが、その合計額は十一兆ドルにも達する。これは米国のGDP総額にほぼ匹敵し、世界のGDPの四分の一にもあたる。世界の金融システムは破綻寸前どころまでできているのだ。なぜこんなことが起きたのか。この事態を解説しようとする書物はいろいろ出たが、私は本書がベストストリ―の一冊だと思う。すでに欧米の経済図書館賞を次々に



趙紫陽 極秘回想録

受けることでもわかるが、とにかく今回の経済危機の一番わかりにくい部分をこれほどわかりやすく解説してくれる書物は他にない。なにがわかりにくいという、今回の危機の根底にあるのは、CDS(クレジット・デフォルト・スワップ)、CDO(資産担保証券)、ABS/CD(再証券化商品)などといった、英字やカタカナ文字だらけの高度な金融技術を使った複雑怪奇なデリバティブ商品の数々なので、そのすべてについて、それがどのような金融商品で、なぜ生まれ、どのような金融リスクをもたらしてしまったのかを、実にわかりやすく、エピソードいっぱい解説してくれる。

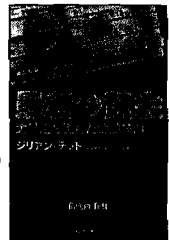
著者はファイナンシャル・タイムズ紙の金融担当副編集長。世界各地の股にかけて金融界の大物たち取材してきたベテラン中のベテラン記者。彼女は十年前、日本の金融危機の真最中に東京支局長として日本におり、日本の危機をつぶさに観察してきた。次々と

起こる、不良債権の山を抱えての銀行の経営破綻、公的資金の注入、中央銀行の量的緩和政策などなど、こんなバカなことば進んだ欧米の金融界では起ころはずがない、と当時は思っていたのに、今回そのすべてが世界中で起きたという。危機をもたらしたものは、米国の銀行界が八〇年代からはじめた、信用リスクをパララシートから外して分散させる技術だった。本書はその金融技術の誕生の瞬間を語る実に見事なエピソードから始まる。その技術が世界の金融界を席巻していくさまを語ることで、今回の危機の全貌が語られていく。

米政府はなぜリーマン・ブラザーズは見放したのに、AIGは国有化までして救おうとしたのか。その理由がわかれば今回の危機

の本質がわかる。第三部破滅」で語られる世界金融システムの大破綻状況には本筋にゾッとさせられる。危機はまだ終わっていない。

×月×日 I・I・ロストノフ『ソ連から見た日露戦争』(原書房 3800円+税) は、日露戦争を全く別の角度から見せてくれる。日露戦争は二〇世紀に入ってから世界史が全く新しい発展段階に突入した(巨大列強が世界再分割のために高度に激烈な闘争をはじめた)ことを示すものとして、米西戦争、イギリス・ポア戦争と同じ流れにおいて理解すべきものだ。これは世界史に遅れて登場してきた新帝国主義国家(日本とロシア)が、北東アジアにおける覇権と満州の膨大な地下資源を賭けて争った帝国主義戦争だったが、それは同時にロシア国内では、革命(一九〇五〜一九〇七年の世界革命II血の日曜日)ウィットテ内閣)をもたらし、帝国を自壊させる



立花隆の黄金

×月×日 シリアン・テット『愚者の黄金 大暴走を生んだ金融技術』(日本経済新聞出版社 2000円+税) が面白い。

×月×日 八木雄二『天使はなぜ墮落するのか 中世哲学の興落』(小社刊)には、この連載の五十回分も収録されています

『私の読書日記』は、立花隆、山崎翠、酒井順子、